自然栽培パーティ その6

「いのち」をいただく。わたしの「いのち」になる

「わぁ、あったかい」。
ニワトリのお腹から見つけたたまごを手のひらに受けて、子どもが言った。
障害児のデイサービスと学童保育ではじめた食育活動。
コメや野菜を自然栽培して、ときにトリもさばいてみんなで料理する。
ほのぼのの所長、岡元ルミ子さんは、
「顔の見える人たちの困りごと」を仕事にして、
学童保育や障害児のデイサービスをはじめた。
それが、食育になり、自然栽培にもつながった。
その自然栽培が、障害者、高齢者、若者たちの仕事づくりに広がろうとしている。

編集部=文
text by KOTONONE
岸本 剛=写真
photograph by Tsuyoshi Kishimoto

食育のための自然栽培

遠くに、桜島がかすんでる。

鹿児島県霧島の国分地域福祉事業所ほのぼのでは、デイサービスに通う障害児たちが自然栽培をたのしんでいる。五〇坪に満たない、子どもの遊び場のような畑。あちらこちらで鋏を使う音がする。見事にふぞろいなナスびやオクラ。くねくね曲がってたり、太っちょだったり。ひょっとして、品種が混ざっているのでは、と自然栽培パーティの担当、内杉健生(けんせい)さんに聞けば、「いやあ、そんなはずは…」と笑った。日向ぼっこしているようなのんびりした声。カメラマンがニコニコして、カゴの中の野菜を撮った。「水、一回ぐらいやりに来ただけなんですけど、育つんですね」と内杉さん、どこまでものどか。それじゃ、自然栽培じゃなくて、放し飼い農法かな、と言おうとしたけど、たのしくて笑ってしまった。

障害児と施設に戻って、トリをつかまえる。庭の隅の小屋に、六羽ほど飼っている。ときどき、食材になって減ってしまった、とほのぼのの所長の岡元ルミ子さんが笑う。明日の昼の給食用に、これから二羽を絞める。内杉さんが、小屋に入ると、トリが危険を察知して隅っこに逃げる。騒ぎを聞きつけて、障害児たちが部屋から出てきた。「やめて、かわいそう」と声が上がる。「シロちゃんだけはやめて」と誰かが言った。名前を付けてかわいがっていたトリ。逆に、その声に勢いを得たように、男の子が小屋に飛び込む。トリをつかまえて、ダンボール箱に放り込む。そのトリがすきを見て飛び出した。庭中をかける。泥団子をつくっていた女の子の後ろに逃げ込む。こわがって、泣き出す子。抱きしめる岡元さん。やっとつかまえたと思ったら、また、手をすりぬけて、車の下へ。潜って追い詰めると、タイヤの上に乗る。何をやるにも、大騒ぎ、大仕事。やっとのことで、つかまえて、学童保育の施設になった民家に急ぐ。

食べる前は、「いのち」だった

トリをさばく名人の　おじさんが来るまでに、お釜いっぱいにお湯を沸かす。学童の子どももいっしょに、庭で枯れ枝を拾い、枝をくべ、薪を足す。

湯気が立ち上る。おじさんがやってきた。木野田安男さん。四本の棒と、コーンを出してきた。それに、底光りのする包丁。コーンの先がカットされている。棒を立てて、コーンを逆さにセットする。さあ、やるか、内杉さんに安男さんが声をかける。子どもたちは、ダンボールのふたを少し広げて、ニワトリをのぞき込む。

自然栽培の野菜の収穫は、障害児の仕事

自然栽培パーティに参加して1年目の田んぼ

逃げまわるニワトリをつかまえた